

子どもの本だな 75

このページは子どもたちにすすめたい本をとりあげています。本を選ぶときの参考にしてください。

わにがまちにやってきた

チュコフスキー 作 内田 莉莎子 訳
瀬川 康男 絵 (岩波書店)

むかし、1匹のワニが町にやってきました。名前はワーニ・ワニーイチ・ワニスキー。町の人たちは、ばけものだとワニをはやし立て、いたずら子犬は、ワニの鼻面にかみつきます。するとワニは、子犬を飲みこみ、かけつけたおまわりさんも飲みこみました。町の人たちは震え上がりますが、勇士ワーニャだけは、おもちゃの刀を振り上げて、ワニに向かいました。ワーニ・ワニーイチはおろおろと降参し、おまわりさんと子犬を吐き出しました。まちを救ったワーニャはたくさんのごほうびをもらい、ワニーイチは飛行機でアフリカの家族の元へと帰りました。

ロシアのペトログラードが舞台の絵本。リズムカルな詩のような文章が声に出して楽しく、動きのある絵がユーモラスな雰囲気を盛り上げます。読んでもらえれば3歳くらいから。

(光藤)

海へ出るつもりじゃなかった ランサム・サーガ7

アーサー・ランサム 作 神宮 輝夫 訳 (岩波書店)

ジョンたち4人兄弟は、お母さんに海には絶対に出ないと約束し、大学生のジムの小型帆船に乗り込んで、川下りをするようになりました。翌日、風にあい、ジムは4人を残して、補助エンジンのガソリンを買いに出かけました。ところが、ジムの待つ間に、濃い霧の中で引き潮に船が引きずられ、ジョンは急いで錨の鎖を伸ばそうとしますが、鎖は全部川の中に落ちてしまいました。錨をなくした船は海に向かってどんどん流され、とうとう、海との境に来てしまいました。「生死が問題になる場合、あらゆる規則は海に捨てられる」というお父さんの言葉を胸に、ジョンは海へ出ることを決断しました。

次から次に迫る危険に力を合わせ立ち向かい、たどり着いた見知らぬ港でお父さんと再会し、大きな安堵をもたらすこの冒険は、スリルとサスペンスを感じさせ、最後には大きな満足を与えてくれます。11歳位から楽しめます。

(西村)

1月	2月	1・2月の移動図書館 (いずれも木曜日です)					<お知らせ> 毎週土曜日に 「おはなしの時間」 を開いています。 ・4歳～2年生 11:00～ ・3年生～中3 11:30～ 1月のおはなしは、 「小さな赤いセーター」「牛 方とやまんば」「犬とねこと うろこ玉」などを予定してい ます。詳しくはプログラムを ご覧ください。
9日	6日	塚森 地域内 10:30～10:50	沖代 地域内 11:00～11:20	福地(三反長) 地域内 14:30～14:50	米田 公会堂 15:00～15:20	竹広南 公民館 15:30～15:50	
16日	13日			原池団地 公民館 15:00～15:20	山田 掲示板前 15:30～15:50	原 太田東地区農村 交流センター 16:00～16:30	
23日	20日	広坂 公民館 10:30～10:50	上太田 公民館 11:00～11:20		太子 ニュータウン 公民館 15:30～15:50	吉福 公民館 16:00～16:30	

『モーツァルトのムクドリ 天才を支えたさえずり』ライアンダ・リン・ハウプト 著

宇丹 貴代実 訳 青土社 286 頁 2018 年 9 月刊 2,000 円 (請求記号) 762.3

「モーツァルトは1羽のムクドリをペットにしていた。」という逸話がある。野生生物の保護に携わってきたネイチャーライター著者は、ある日、ホシムクドリの大群を見てこの逸話がぱっと頭に浮かんだ。ホシムクドリと言え、130年前にイギリスから北米に持ち込まれて以来、侵略的外来種として愛鳥家さえ絶滅を願うほど北米一嫌われている。そんな嫌われ者の雛に「カーメン」と名付け、著者はムクドリとの生活を始めた。カーメンは利口でいたずら好きで実に愛らしい。皆が驚くのは、その羽の美しさと声真似だ。オウム科の鳥に肩を並べるほど、環境音や人の声を模倣する能力があるムクドリは、おしゃべりと歌が大好きだ。モーツァルトとムクドリの出会いもそうだった。

1784年、モーツァルトはウィーンのペットショップで、彼が作曲したばかりのピアノ協奏曲に似た旋律をさえずりっているムクドリに出会い購入した。支出簿には、値段と鳥の種名、その下に自分とムクドリ両方の旋律を書き、「それは美しかった！」と記している。ムクドリと暮らした3年の間に『ハイドン四重奏曲』や『フィガロの結婚』が誕生し、ムクドリが死んだ時には、正式な葬儀を行い、愛情のこもった追悼の詩を書いている。面白いのはその後発表された『音楽の冗談』。不協和で軽薄な曲と低評価だったが、著者やある動物学者は、この曲はムクドリの声の特性があり、ムクドリの歌声そのものだと言う。聴くと確かに鳥の歌声のように聴こえてくる。モーツァルトがムクドリの歌声を曲にするほど愛していたのだと思えてならない。

著者が綴るカーメンとの日常と共に、ホシムクドリの生態、モーツァルトの歴史やムクドリとの関係が、動物学、鳥類学、音楽理論、さらには言語学、聴覚学などを織り込みながら描かれている。この1冊で、モーツァルトがより身近に、ムクドリがこんなにも愛らしいものになるとは、思いがけない幸運だった。

(池之上)

1月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
			X	X	X	4
5	6	X	8	9	10	11
12	13	X	X	16	17	18
19	20	X	22	23	24	25
26	27	X	29	30	31	

2月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	X	5	6	7	8
9	10	X	X	13	14	15
16	17	X	19	20	21	22
23	24	X	X	27	28	29

- * カレンダーの×印は 休館日
- * ■ は館内整理日、返却のみ受付 (10:00~17:00)
- * 開館時間は 10:00~18:00、金曜日は20:00まで開館

地下水

初春のお慶びを申し上げます。本年も、どうぞよろしくお願いします。

昨年末、館内研修として、職員で『文学入門』桑原武夫著(岩波新書)を読んだ。その第2章で著者は、すぐれた文学とは、読者に新しい経験させ、自己を変革させるものであると述べている。1冊の本を読んで、自分の感じ方や考え方が変わるほどの経験をするのが、確かにあると思う。

私自身、先日『星の王子さま』についての講演会を聞き、久しぶりに本を読み返した後、庭に咲いていた深紅のバラが、鮮やかに目に飛び込んできて驚いた。クリスマスのおはなしの時間に「ちいさなるば」という話を語った時、6歳の

Tくんの目が輝き、嬉しそうに微笑んでいた。Tくんはきつと、主人公のろばになってサンタクロースのそりをひき、子どもたちにプレゼントを配る手伝いをしたに違いない。

すぐれた本を楽しむことは、新しい経験を重ね、世界が広がること。今年も、子どもたちに新しい経験となるような本を届けたいと思う。

(池田)

